に、関西における民間産婦人科医の双壁をなし、学会に寄与するところまた大であった。彼は医史学に強い関心を示し、佐伯コレクションともいうべき広範な医学史関係史料を集めた。彼の妻は、新島を支援した奈良の山林王、土倉庄三郎の娘で同志社女学校の出身であった。九人の子供をもうけた。

本稿を記すにあたり阿知波良子、北垣宗治、指宿照久、坂上俊之の各氏に学恩を受けた。謝意を表します。

（大阪府豊中市）

東博銅人形の製作者および年代について—幕府医官山崎氏の事跡—

小曽戸　洋

東京国立博物館に所蔵される針灸銅人形は、周知のとおり日中伝統医学史上つとに注目される貴重な文化財であるが、その製作地と時代については、中国明代説、日本江戸時代（十七世紀）説、あるいは北宋天聖の原像とみるむきすらあり、これまで一定の見解を得ない。またその来歴についても異説がある。

演者は最近、幕府医官山崎氏の事跡を調査中、はからずも山崎次善の墓碑銘のうちに、この銅人形製作の謎を解くべき重要な手がかりがあることに気づいた。これは従来の諸説を一新するに足る資料と考えられるので、以下に報告し考察する。

幕府医官山崎氏に関する記録は、管見では『寛政諸家譜』『日本医譜』『多紀氏の事蹟』中にみえる程度で、医史

学上ほとんど知られていない。しかしかつてその墓地を精査した報告がある。伊藤武雄「幕府鍼医山崎氏代々墓所記」(『掃苔』四巻十一号、昭十一)がそれで、伊藤は震災で転倒した山崎氏代々の墓碑を森潤三郎とともに修復し、右の稿を成したのである。演者はこのたびその墓のあるという東京白山の寂円寺を訪ね、同寺墓地を調査したがすでになく、住職にその旨質したところ、以前は確かにあったがいまは処分したという。したがって伊藤の報告が墓碑に関する唯一の資料である。次に山崎氏の略系を示す。

〔初代〕次氏。元禄五年奥医。同十一年六月十二日没。〔二代〕茂種。享保二年五月四日没。年三十四。〔三代〕次茂。妻は多紀元孝の女。寛保二年七月五日没。年三十三。〔四代〕次良。幕府医官湯川春房の第六子。山崎家を継ぐ。宝暦九年寄合医。天明二年致仕。寛政十二年六月九日没。年六十八。〔五代〕次善(子政)。宝暦十一年三月朔生。天明二年家督を継ぎ、寛政元年寄合より奥医に、同四年医学館鍼科教諭となる。同七年法眼、数年にして致仕。天保五年十二月四日没。年七十五。著書に『銅人彙攻』十巻、『鍼灸類纂』三巻等がある。〔六代〕元方。安永元年七月二十六日生。多紀元徳の四男、すなわち多紀元簡の実弟。山崎家を継ぎ、寛政十二年次善に代り医学館で鍼学を講義。文化十年奥医、文政二年法眼。天保十二年七月九日没。年七十一。〔七代〕琦。明治七年七月没。その後は、羽倉敬尚の調査によれば、廃絶となったという。

さて、五代次善の墓碑銘は亀田綾瀬が撰し、中沢雪城が毫したもので、そのうちに次の一節がある。「嘗奉命、製銅人式、蔵之黌中。凡経絡腧穴之所灌注、筋骸骨度之所繫、一覧可明其理也。鍼科之家推以為規橅」。また、最後の四言賛詩に「一鍼之功、続命済危、銅人垂後、可傚可師」とある。これより、山崎次善が医学館に奉職中、幕命を奉じて銅人模型を作製し、これを医学館に蔵したことは、疑いない事実である。この事実にさらに次のようなことがらを考え合わせてみよう。

①東博筋によると、この銅人は少くとも「江戸医学館に所蔵されていたのを、明治十年頃、博物館の準備のための博物局に移管された」ことは確かだという。②『支那伝来鍼灸腧穴銅人像図解篇』(昭十一)に、「博物館々官入田氏に聞けば、該銅人形と共に当館への納入の際銅人経と題す

る書冊添付ありしが、先年宮内省図書寮の蔵保に移れる越きを承知」し、図書寮を訪ね、「銅人腧穴鍼灸図経といひ拓本にて四帖あり。……巻末に櫟蔭の附記」ある書を拝観したと記されている。この書は書陵部現蔵の『銅人腧穴鍼灸図経』（五五八函二六架）のことに違いない。したがって同書はもと東博銅人に添付されていたことが判明する。③右の書陵部本に付される多紀元簡の「銅像考」に「竹田明堂、洪武中入明、載銅人帰、…後燬于明暦之災、寔可惜焉」といい、「右銅人考一編、廿余年前、為山崎子政（次善）所撰也。…文化三年…簡識」とある。これによって「銅人考」は天明中に元簡が次善の要望に応じて撰したことが知れる。前述の家系からわかるように次善と元簡とはすこぶる親密な関係にあった。④医学館蔵の銅人が（仮に他所蔵であっても）明や宋の中国将来物ならば、元簡が「銅人考」でそれに触れぬはずがない。また他の考証学者のだれ一人中国伝来の銅人なるものについて言及した者はない。これが次善の所製にかかるものとすれば、すべて合点がいく。⑤東博には他に二点の経穴人形があるが、次善のそれがこの二点に該当する可能性はまったくない。なぜならこの二点の製作者・年代は別に明らかであるからである。

以上により、演者は、東博所蔵の当該針灸銅人形は、山崎次善が幕命を奉じて鋳造せしめたものにほかならないと結論する。その製作年代は次善が江戸医学館で活躍した時期、すなわち寛政年間（一七八九～一八〇〇）、十八世紀末である。

（北里研究所附属東洋医学総合研究所・医史文献研究室）